

インドネシア人看護師・介護福祉士候補者たちの 支援団体がスタート

日本インドネシア EPA 協定により
来日するインドネシア人看護師・介護
福祉士候補者のために何かできないか
と、看護、介護関係者をはじめ、さま
ざまな職種、立場の人たちが、サポ
ート組織を立ち上げた。その「ガル
ダ・サポーターズ」設立記念会が 2009
(平成 21) 年 6 月 14 日に行なわれた。

■ 悩み相談などで候補者をサポート

この日 JICA 地球ひろば(東京都渋谷区)の講堂には、五輪真弓の名曲「心の友」の大合唱が響いた。声の主は、EPA 協定によりインドネシアから来日している看護師・介護福祉士候補者たちである。彼らの支援を行なう組織「ガルダ・サポーターズ」の設立記念会での一場面だ。この曲はインドネシア全土で大ヒットしたという。

「ガルダ・サポーターズ」は、看護・介護分野はもちろん、インドネシア関係の研究者や医師、行政書士、出版関係、日本語教師などさまざまな職種、立場の有志 18 名が、ボランティアで今年 1 月から準備委員として集まり、6 月 14 日に設立にこぎつけたもの。EPA 協定に基づきインドネシアから来日する看護師・介護福祉士候補者が「日本に来てよかった」と思える生活環境整備を行なうとともに、日本とアジアの医療・介護の質の向上を目指して候補者たちの支援などを行なうことを目的としている。

事務局長は健和会・看護介護政策研究所所長の宮崎和加子氏。ほか 5 名による共同代表制となっており、6 月時点で会員は約 140 名である。

設立記念会は、宮崎氏による会の目的や発足経緯、活動内容の説明にはじまり、日本看護協会からの祝電披露、インドネシアと日本の関係についてのプレゼンテーション、候補者たちからの現状報告、受け入れ施設からの報告



インドネシア人看護師・介護福祉士候補者と宮崎和加子氏(後列中央)

など、盛りだくさんの内容で開催された。

設立の発端は昨年 7 月。宮崎氏を含めた看護、介護関係者 3 名の有志がインドネシアを訪問した時から、支援の構想はもち上がっていたという。

今年 1 月には、全国へ着任する看護師・介護福祉士候補者たちの横のつながりをつくろうという宮崎氏らの呼びかけで、候補者自身の情報交換や交流のための会「ガルダ・ネットワーク」が発足している(会員約 70 名/6 月時点)。

同ネットワーク発足と同時に、彼らを支援する団体をつくるための準備会が立ち上がり、今回の「ガルダ・サポーターズ」設立に至ったというわけだ。

現在すでに行なわれている「ガルダ・サポーターズ」の主な活動内容として、SOS コールの対応などが紹介された。インドネシア人の通訳・翻訳者であり「ガルダ・サポーターズ」運営委員の一人で、日本人と結婚したインドネシア人である、丹マウラニ氏が、SOS コール専用の携帯電話を持ち、「ガルダ・ネットワーク」の会員を対象に夜 9 時まで相談に応じている。ほかに検討が重ねられている支援項目としては、日本語学習への支援、パソ

コンや携帯電話の無償提供、ホリデイ・ホームステイなどである。今後、これらの実現に向け引き続き活動するとともに、ニュース発行やホームページづくりなどを行なっていきたいという。

■ インドネシアをもっと知って

設立記念会の第二部では、来場者に日本とインドネシアとの関係を知ってもらおうと、JANNI(日本インドネシア NGO ネットワーク)代表で大阪大学教授の松野明久氏のプレゼンテーションが行なわれた。第二次世界大戦中の日本軍のインドネシア占領時代のことから、貿易関係、現在の経済協定に至るまでを解説。

そして、続くインドネシア人看護師・介護福祉士候補者からの現状報告は、なんと 30 名以上もの看護師・介護福祉士候補者が集まり、歌あり踊りありのショーで元気な様子を見せてくれた。冒頭で紹介した歌も、この時に日本語で披露されたものだ。設立記念会の参加者は多少驚きつつもこの様子を温かく見守っていた。この数時間だけでも日本とインドネシアの文化の違いを十分感じる事ができた。

「ガルーダ・サポーターズ」設立記念会開催 病院・施設間の情報交換の促進を

■お互いに楽しく仕事のできる環境

づくりが管理者の役割のひとつ

特に、受け入れ病院からの参加者が熱心に聞き入っていたのは、2008(平成20)年度に2名のインドネシア人看護師候補者を受け入れた、医療法人社団永生会永生病院(東京都八王子市)の宮澤美代子氏による報告である。

永生病院では、EPAを念頭に、2004(平成16)年から看護助手に在日フィリピン人を受け入れてきた。このため、スタッフや患者さんとの間で問題は特に起こらず、スムーズな受け入れだったと振り返る。

現在、インドネシア人看護師候補者に対し、「とにかく国家試験に合格しよう」という方向で支援を行なっているという。2人の候補者は4月から月～金の午前中は毎日、日本語学校に通い、午後は病院での看護助手業務、そして終業後は個人での勉強というスケジュールで動いている。ほかに、5月からは毎週土曜日、NPO団体の支援で看護師国家試験対策の指導も行なわれている。

2月の着任後から毎日、その日のスケジュールを記録して提出していたが、うち1名はレベルアップを申し出、今は記録以外の看護の勉強や国家試験対策に時間を割いている状況だ。

生活面、メンタル面でのフォローは、近所に住むスタッフや看護部長、またインドネシア語の分かる市民ボランティアなどの電話番号を家の壁に貼るように指示するなどしているという。

宮澤氏は、今回のEPAでの受け入れでは、インドネシア人向けの教科書や資料もないなかで手探りの状況であることや、国家試験不合格者への救済検討の必要性にも触れた。そして、看護の質を担保しつつ、外国人看護師候補者だけではなく、みんなが楽しく仕事のできる環境をつくっていききたいと

述べた。

■自分たちで解決できる力を

設立記念会の終盤、SOSコールに寄せられた相談内容も一部紹介された。3月1日の設置から5月31日までに寄せられたコールは40件。給与や待遇、仕事内容に関する悩み相談から、〇〇を買うにはどこに行ったらよいかなど、日常生活面での相談などである。電話を受けた内容は運営委員で討議しながら、単に助けるのではなく、自分たちで問題解決できるような支援を行なっているという。その問題を職場の誰にどういう日本語を使って質問すれば分かるのか、自分で解決していくための方法を教えている。

電話相談を受けている丹氏は、現在の候補者たちの日本語のレベルでは、現場誤解を招くことがあるかもしれないが、その溝を埋めていきたいと述べた。

また同ネットワーク会員や、受け入れ施設を対象に、5月に行なわれたアンケート結果も発表された。候補者向けアンケートに応じたのは看護師候補者21名、介護福祉士候補者14名。看護に限ってみると、日本語の壁はもちろん、一部ではあるが看護や看護助手というものの業務範囲の違いから若干

の戸惑いが生じているということも報告された。

18の病院と15の介護施設が回答した、受け入れ病院・施設へのアンケートからは、施設により研修状況に大きな差があることが明らかになっており、教材の必要性や病院・施設間での情報交換を求める声も寄せられていた。

外国人看護師・介護福祉士の受け入れに賛成、反対、それぞれの立場から多くの人が活動を支えている「ガルーダ・サポーターズ」。サポーターたちの思いはさまざまである。しかし国家間の経済協定ですでに「人」がやって来ている現状を前に、とにかく支えていかなければという点では共通しているといえる。

ここには来日しているインドネシア人看護師・介護福祉士候補者の本音が今後も集まってくるだろう。10月にはインドネシアからの第二陣が来日する。これからの活動に注目していきたい。

●神保康子



設立記念会に集まった「ガルーダ・サポーターズ」